

第55回日本胸部外科学会総会

森田 茂樹*

第55回日本胸部外科学会総会が平成14年10月9日から11日の3日間、安井久喬九州大学教授の主催で福岡市のシーホークホテルアンドリゾートにて行われた。「生命を吹き込む世紀へ、Hand to Hand, Heart to Heart」をメインテーマに内外から2,000人余りの参加者を集め活発な討議が行われた。

学術集会では4つのシンポジウム、4つのパネルディスカッション、6つの招請講演、3つの教育講演が行われ、胸部外科に関する Up-to-data な議論がくりひろげられた。

胸部外科における EBM

近年胸部外科においても Evidence に基づいた術式あるいは治療法を選択が求められてきた。「長期予後よりみた僧帽弁手術におけるエビデンス：温存、生体弁、機械弁？」と題されたシンポジウムでは弁膜症とくに僧帽弁に対するアプローチが論じられた。榊原記念病院の加瀬川均氏、神戸市民病院の岡田行功氏らは、豊富な症例に基づき弁形成術による優れた成績を報告し弁形成術が可能であれば弁置換術よりも形成術を選択すべきであることを長期予後より実証した。国立循環器病センターの高橋昌氏はとりわけ小児において弁形成術を行う必要性が高いことを強調した。九州大学の益田宗孝氏は成人の僧帽弁疾患に対する3つの選択枝（機械弁置換、生体弁置換、弁形成）に関して Retrospective に検討し弁形成術の優位性を示すとともに、初回手術には機械弁による僧帽弁置換を受けた方が再手術の頻度が少ないことより生体弁よりも機械弁を選択すべきだと結論した。一方国立循環器病センターの坂東氏は、脳梗塞が

機械弁、生体弁においても大きな合併症であることを示し、そのもっとも大きな危険因子が心房細動であること、また Maze 手術を合併して行うことにより機械弁置換症例でも脳合併症の危険を低減させ得ることを示し注目された。

パネルディスカッション「CABG の新しいスタンダード」では小倉記念病院の羽生道弥氏、金沢大学の竹村博文氏、国立循環器病センターの小林順二郎氏らがいずれも基本的に全例に人工心肺を用いない Off pump CABG を行い優れた成績を報告し、施設によっては Off-pump CABG がスタンダードとなり得る可能性を示した。一方東京女子医科大学の遠藤真弘氏は、両側内胸動脈を用いた CABG の方が左内胸動脈のみを用いた手術よりグラフトの開存率に優れていたことから動脈グラフトを多用するべきであると結論した。豊橋ハートセンターの馬場寛氏は左主幹部病変に対するカテーテルインターベンション (PCI) の成績を CABG と比較し急性期の成績には差がないことを示したが、遠隔期には狭心症の再発率が PCI 群で高かったことより今後左主幹部病変に対する PCI に関しては、慎重な検討が必要と考えられた。

心臓移植を必要とするような重症心不全症例に対する左室縮小手術、いわゆる Batista 手術に関しても Evidence に基づいた討議が葉山ハートセンターの須磨氏と Cleveland Clinic の McCarthy 氏との間で衛星通信を用いて行われた。須磨氏は待機的手術における死亡率が急手術のそれより優れていたことなどより症例を選べば Batista 手術により拡張型心筋症の患者の予後を改善しようと述べたがこれに対し McCarthy 氏は Batista 手術後の Event Free Survival が1年後に46%であったこと、また生存例においても自覚的症狀には改善が

*九州大学医学部附属病院心臓外科

みられるものの心機能そのものは正常には改善し得ないことより Batista 手術が心臓移植に替わる治療法とはなり得ないと述べた。

先端医療と胸部外科

今回の胸部外科学会総会では「21世紀における胸部外科の展開：分子生物学・再生医療から臓器置換・人工臓器まで」と題し先端医療技術の胸部外科領域への応用が討議された。胸部外科領域、とくに循環器外科領域では分子生物学的取り組みが腫瘍外科領域に比べて遅れていたとの認識に鑑み、胸部外科領域における再生医療など先端医療の演題を募集したところ、香川医科大学の山本恭通氏は気管軟骨再生を人工気管に応用した研究、大阪大学の澤芳樹氏は重症心不全の治療としての再生医療の研究、東京女子医科大学の新岡俊治氏は人工血管への再生医療の応用の研究を発表した。胸部外科領域でも再生医療が大きなテーマであることを印象づけた。また九州大学の富田幸裕氏は移植後の拒絶反応の克服のための免疫寛容について発表し今後の研究の展開が期待された。癌の遺伝子治療の分野では久留米大学の峰孝志氏が肺癌、千葉大学の松原久裕氏が食道癌の遺伝子治療に関して臨床応用も視野に入れた研究が展開していることを報告した。

今回はこのシンポジウムとは別に先端医療に関して3つの教育講演が行われた。東海大学の浅原孝之氏は「幹細胞生物学の血管医学への応用」、大阪大学の森下竜一氏は「ポストゲノム時代の遺伝子治療」、千葉大学の谷口克氏は「移植免疫制御に重要な NKT 細胞免疫系」に関してそれぞれ講演し胸部外科領域において講演者らの専門領域の研究成果がどのように応用される可能性があるかを会員にわかりやすく解説していただいた。

医療としての胸部外科が抱える諸問題

手術料70%の施設基準の導入、DRG への移行を含む健康保険制度の変革、研修医2年制の開始、専門医制度の発足など胸部外科医が直面せざるを得ない問題が山積していることを受け、特別シン

ポジウム「胸部外科の抱える諸問題」が行われた。胸部外科の経済的側面に関しては、九州厚生年金病院の瀬瀬顯氏が心臓外科医の立場から、岡山大学の西田在賢氏は医療経済学の専門家の立場から、ともに心臓外科において収益をあげるためには戦略に基づいた医療を行う必要があることを強調した。九州大学の鮎沢純子氏はリスクマネジメントのためには日常から「法廷外紛争」に対応するための取り組みが必要であること、国立保険医療科学院の小林秀資氏は医薬品、医療機器のシンポジウムと技術革新の中で、今の医療保険制度の大幅な手直しが必要であることを述べた。一方、埼玉大学の許氏は、胸部外科医がどのように処遇されているかをアンケートに基づき報告した。日本の胸部外科医の労働環境はかなり劣悪である一方、臨床修練に対する満足度は低いことが指摘され、今後の改善が急務であることが認識された。多方面にわたる胸部外科の問題を解決するにあたり、聖マリアンナ医科大学の長田博昭氏は常に「対社会的機能」を念頭に国民の理解を得るための学会としての行動の必要性を強調した。

会長講演：21世紀の胸部外科発展のために

安井久喬会長は会長講演で胸部外科の半世紀の歩みと自らの心臓外科医としての歩みを重ね、本邦における胸部外科の発展における胸部外科学会の貢献の大きさを述べたが、国立大学の独立法人化、専門医制度と大学院制度の両立、胸部外科における大学病院と第一線病院の役割の分担などの問題に対し、今後胸部外科学会が Opinion leader となるべく積極的に学会として取り組むべきであると結んだ。

この他にも Meet the Expert, Debate, イブニングセミナー、ビデオセッション：私の手術、海外の外科医の招請講演、紹介しきれなかったシンポジウムやパネルディスカッションなど興味ある企画が目白押しであったが、紙面の都合で割愛させていただいた。関連学会「印象記」ということで私見による偏った文章となったことをご容赦願いたい。